

博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査） 石井 溥 印

論文の概要

橋健一氏の博士学位請求論文はネパールの「プラジャ（『市民』）」と呼ばれる人々に関する質の高いフィールドワークの成果に基づく研究である。従来、外部の人々から「未開」と形容されてきた「プラジャ」の人々は、自分たちが何者かあまり語ろうとしない。本研究は、そのような人々の自己イメージを探るという野心的な試みである。その構成は従来の多くの民族誌とは異なるスタイルを取り、人々が調査者自身に与えた4つの異人表象を手掛かりとして人々の生活の位相を描き、その背景にある象徴世界を組み立てるという独特なものである。その分析のためには、エスニシティ論や異人論、文化生成論などの人類学の議論をはじめ、社会学、精神分析などの議論が検討・援用され、また、同時に国家と民族との関係が様々な側面から考察される。そして、相互的な交換を重んじる平等主義的な世界を自らのものとしてきた「プラジャ」の人々が、階層的な国家社会の下、開発という国家主導の流れの中で、外部者との接触を繰り返しつつも、その流れに乗り切れず、他者との関係の築き方を模索している様相が分析される。

論文の内容

本論文の第一部「序章」は2つに分けられ、第1章「目的と課題」では、調査の最初と最後の経験を述べた導入部の後に、論文全体の枠組みとなるべき理論的考察がおかれる。そこでは、異人表象および民族の呼称をめぐり、調査対象の人々の自己イメージをどう捉えるかという点がまず問題とされ、藤岡喜愛のイメージと人間の研究を始点として議論が展開される。そこで重要なのは自己イメージが意識化されているか否かの点であるが、これについては、調査対象の人々（「プラジャ」）にとっての、自民族に関する「自己表象」の困難さが特徴的とされる。それにより執筆者の研究では、別の諸側面（執筆者に向けられた異人表象）から接近して人々の自己イメージを想像することが必要であるとされる。次にこの議論はエスニシティ論と関係づけられ、F. Barth を引きつつ、本論文について、国家によって「プラジャ」という名称を与えられた調査対象の人々が、他者との関係世界や自らの属性をいかに捉えているかを調査資料から抽出する試みであると位置づけられる。従来のエスニシティの諸議論に関しては、A. スミスや箭内匡を評価しつつも批判し、通時的議論に固着せず、共時的に「見知らぬ者」に関わる複数の象徴世界を扱って対象の人々のアイデンティティに接近したいとする。それは次いで異人表象の研究に接続され、赤坂憲雄、小松和彦、G. ジンメル等の論の検討の中で、前2者が積極的に用いる二項対立が本質的でないと批判される。そして「分節化」やジンメルの「切断／接続」（あるいは「排除／包摂」）の方が、秩序構成原理としてより普遍的であるとされ、以下、本論文の分析概念として用いられていく。

第2章では、第二部以降で展開される4つの象徴世界が手短かに紹介された後に、従来の異人表象を扱った研究と本研究の相違が述べられ、本研究については、特定の異人（＝執筆者）に与えられる表象の多様性に注目し、それに関わる生活の様々な側面を掘り起こして人々の生きる世界を描くという姿勢が強調される。

第二部「チンランの世界」では、執筆者が調査地に着いた初日に、女性や子供を中心とした人々から「チンラン（人喰い鬼）」かと受けとられた経験を出発点とし、出自と縁組み、祖先と超自然界に関わる象徴世界が、対象に密着した参与観察および豊か

な語りの記録をもとに分析される。

「チンラン」とは人（特に女性の肉）を喰う鬼として語られるものであるが、執筆者はそれをこの社会の人間と対置し、それによりこの社会の人々がどのような存在であるかを浮き彫りにする。すなわちチンランは、人間に対し一方的に贈与しつつ殺してしまう他者で交換の外部に位置するものであり、一方（この社会の）人間とは、分配・交換を行いつつ生きていく存在であると捉えられる。後者はより詳細に分析され、狩猟において厳密に平等な分配を行う人間（男性）、結婚・婚姻関係のなかでブタ肉等を相互に頻繁にやりとりする人間（姻戚）、父系の系譜を中心に土地・生産物を用益・利用している人々、さらにはトンコロと呼ばれる病気払い儀礼をともに行う人々（「父系親族」）であると捉えられる。交換の原動力や歯止めとしては「愛」・「馴染み」、その不在を寂しがる「ンゴウラン」という感覚や「恥」が注目され、それが外部的な「毒」と対比されることで、交換の内部の者の感情が明らかにされる。

本論文の特徴は、このような対比、分析を裏づけるものとして豊富で良質な民族誌のデータが提供される点で、日常生活や狩猟、あるいは結婚、それに伴う贈与、駆け落ち、系譜と所有・分配、葬式や種々の儀礼が、対象に密着しつつ生き生きと描かれ、また、鬼、始祖、祖先、超自然界等々に関する伝説や語りが様々に提示、分析される。中でも、マーパンデ（大シャーマン）が人々の魂を祖先霊たちのもとに連れて行き、その途次で供物を捧げつつ病気を防ぐ儀礼であるトンコロンの記述・分析は、儀礼の観察、内容についての聞き取り部分を含め、オリジナリティの高いものであり、「プラジャ」の人々の世界観（病因論、人間や事物の起源論等を含む）を見事に提示している。

第三部は、調査対象の人々が執筆者に与えた他の3つの異人表象である「チョール」、「サール」および「ドゥキ」に関わる世界（位相）の分析である。

「チョール」とは「泥棒」のことであるが、これは「昔」や森の豊かな時代、とりわけ（比較的近い過去の）国家や政府が欠如した状態に結びつけ得るとされる。分析の中心は、秩序の外部としての森に暮らす存在とされる「プラジャ」（チェパン、チョーバン）と「クスンダ」、およびその対照的存在であるバフン（ブラーマン）の対比である。ネパールの他の人々は「プラジャ」を「チェパン」として森の生活と結びつける傾向があり、プラジャの人々も自らを森に結びつける面がみられるが、プラジャの人々が自分達について抱くのは未開な森の住民のイメージではない。人々は外部の存在として未開の民族「クスンダ」を想像し、自らをそれとは異なる者と位置づける。しかしその対極にはヒンドゥー的で、儀礼、水田農耕の知識等を持ち、言葉を正しく操るバフン（ブラーマン）がイメージされる。バフンを核とする秩序は、前世紀の専制国家で固まり今日に伝わるが、プラジャの人々はそれを担う人々に「排除」されつつ、自らも別の他者を「排除」することで秩序に「包摂」されようとしている。このようになされる分析は、興味深いデータに裏づけられ、「クスンダ」についての新たな解釈を含みつつ、対象となる人々の位置づけを見事に明らかにしている。

「サール」は「先生」を意味するが、これはまた「官僚、政治家」や「開発スタッフ」についても使われる。ここで扱われるのは、ひとつには、そのような外部的存在と対比した村の人々の位置づけである。そこでは、読み書きができることや学歴が急に重要と考えられるようになったことが跡づけられる中で、学歴を基準とした階層的な見方が広がっており、読み書きが出来、賢く、知性・理解力がある人が村の中からも出てきていること、そして、そのような人々が読み書きが出来ない人を見下げるとともに「サール」を見上げる現象が指摘される。

学校、行政、開発等は、20世紀後半から導入され、今日人々を深く巻き込んでいる。

それらの導入にともなう生活や考え方の変化の分析もこの章の眼目のひとつで、消費生活や医療等の変化も示される。また時間の経過とともに教育熱が冷め、サークルへの幻滅が深まり、また開発に関しても、村の人々が見下げられ、職にも恵まれず貧しいままで懐疑的になっていることが、開発スタッフと村人たちの会話などをとおして明らかにされる。そして人々による原因究明が、「賢い」他者に対して「プラジャ」をマイナス・イメージで捉える民族的なステレオタイプに向かってしまうことも指摘される。

「ドゥキ（苦痛に悩む人）」は、荷物を背負って泊まる場所もない執筆者に対して1人の村人（ヒラ氏）が投げ掛けた言葉で、執筆者はこの言葉によって彼に受け入れられた。これを扱う章（第二部第3章）では、「ドゥキ」が「最後まで残ったもの」と捉えられ、ヒラ氏の日常の言動やライフ・ヒストリーをもとに、「ドゥキ」に手を差し伸べるヒラ氏の行為の背景にある世界が考察される。すなわち、大柄で温厚で力仕事を評価するヒラ氏は、早くに父を亡くし、学校で先生に叩かれた経験を持ち、また外の町の学校への進学を母親に止められ、村で暮らし続けている、とまず捉えられる。そして彼は、権力的なものには不快感を露わにする一方、内部的なプラジャの論理を振りかざすことにも批判的で、「農民」であることを「現実」と捉え、何が現実に関与するかを慎重に見極めようとする人と性格づけられる。執筆者はそのヒラ氏を、外部と内部の世界の間で立ち往生している存在で、そのダブルバインド的状况の故に「ドゥキ」に共感すると解釈し、また同種の矛盾が開発、進歩に懐疑的なプラジャの人々に共有されるものとする。

結論部では、上記4つの異人表象から抽出された各象徴世界における「プラジャの存在イメージ」がまとめられ、市川や Overing 等の狩猟採集民や焼畑農耕民の交換の議論、Sakai や Escobar 等の「近代」や開発に関わる議論、さらにはベイトソンのダブルバインド理論等の研究と照らし合わせつつ「接続」されることで「主体としてのプラジャ・イメージ」が探られる。そこで浮かび上がるのは、肉や物品の分配などで平等主義的に生きてきたからこそ、開発の時代にも権力の一方的搾取に平等を訴えて抵抗する「プラジャ」、ダブルバインド的状况が進めば進むほど相互扶助的なケアや「愛」を重要視するようになった「プラジャ」等のイメージである。また彼らが、かつて自らの外部とした権力的要素を自らの内に取り入れて他を抑圧する面のある存在であることも指摘される。こうして秩序の内部と外部には入り組んだ対立、闘争関係があることが指摘され、最後に、他者を「排除」するか「包摂」するかのどちらかを選ぶのではなく、新たな世界を創り出し、他者との関係を築いていく可能性を秘めるものとしての「プラジャ」のイメージが打ち出される。

論文の評価

本論文のタイトル（副題）で「プラジャ」として提示される人々は、従来の研究では「チェパン」とよばれ、ネパールの人々のなかで「未開」な民族の代表のように扱われてきた。執筆者はこのような位置づけを根底から問い直し、調査者自身に向けられた異人表象を手掛かりに、「プラジャ」の内と外の世界を人々自身が行う表象化をもとに抽出・分析する。提示される資料は高度な質を備え新しく、論文の構成、分析は斬新である。

執筆者は、調査対象の人々によって与えられた4つの異人表象を手掛かりに、過去の記憶を背負ったこの社会の人々の生活の位相を描き、その背景にある象徴世界を組み立てる。これは「多位相分析」と名づけられるが、それをとおして、狩猟、親族、シャーマニスティックな世界観を含む基層的な生活・文化、森に象徴され専制権力お

よびその不在の時期と関係し現在にまで及ぶ階層的民族関係、今日の開発に関わる問題、それら全てを背負い矛盾を抱えつつ生き続ける個人、がそれぞれ生き生きと描かれる。この提示方法は、外部（異人表象）から内部（の人々が生きる世界）を照射して明らかにするという分析方法とあいまって、この論文に幅と奥行きを与えている。

ネパールの民族や民族関係を扱う研究では、カースト制度との関係が無視できず、カーストが法制化された19世紀の法律自体の研究をはじめ、20世紀中葉の憲法によるカースト差別撤廃以降に見られる、カーストと民族の連続性等々の研究も多い。その中で本研究はネパール以外のエスニシティ論をも批判的に検討しつつ、「想像された可能性としての象徴世界」の抽出を重要視する。この点は実際の分析では、4つの異人表象に関わる分析のほか、一方の極にバフン（ブラーマン）を置き、他の極に「クスンダ」が未開の民族として想像されるとして、その中間の「プラジャ」を浮き出させる手法などに生かされている。

国家との関係は、今日どんな民族を扱う場合にも看過できない要素であるが、本論文はその点には大いに留意しており、専制国家の時代あるいはそれ以前にも目を配った構成をとっている。ただし調査の方法からしても、本研究は実体的な歴史を再構成する研究ではなく、過去の記憶を背負った歴史的主体という観点を保ちつつも、現在の生活の諸側面をそれぞれの「位相」として捉える民族誌である。

本論文で執筆者は、平等主義的に相互交換を行ってきた人々（「チョオバン」＝「プラジャ」の以前からの自称）が、ヒンドゥー社会の正統的メンバーのバフンに対し自ら卑下するイメージも抱きつつ、今日の開発の波の中で悩み懐疑的になりながら「プラジャ（市民）」として生きていく様相を、人々の自己イメージを捉える観点から描く。そこで提出されるデータは、フィールドワークの原点ともいえるしっかりした調査による新鮮なものである。分析は様々な議論をも参照しつつ対象を懸命に理解しようとする姿勢でなされており、また構成にも工夫がこらされ、興味深い論文となっている。

公開審査の概要

学位請求者と審査委員の質疑応答の概略は以下の通りである。

まず評価すべき点として審査委員から、本論文が、「読みやすく、しっかりした、自分が描こうとしている世界と結びついた文体をもっている」こと、斬新な構成をもつ「野心的な民族誌である」こと、「従来の民族誌とは異なるスタイルをもち、全体的に面白くできている」点、そして何よりも、「質の高いフィールドワークの成果に基づく研究である」ことが指摘された。

質疑がもっとも集中したのは、4つの異人表象を出発点として包括的な象徴世界を構成する、という点をめぐってである。その第一は、取り上げられている4つの異人表象が、ここで論じたいものに関して適切な「他者」だったかどうかという点であった。この点に関しては、この4つの異人表象がそれぞれ国家との関係、すなわち専制国家との関係、パンチャーヤット時代、(1990年の)民主化以降の国家との関係を含み、適切な「他者」と考えられるとの答えがあった。これに対し、他の3つの象徴世界は国家と結びつくが、「チンラン」の世界に関しては国家と結びつける視点が抑えられ、プラジャの有機的な世界が分断されている印象を受ける、シャーマンを開発に結びつけてもおかしくない、との更なる質問があった。それについては、現在のフィールドではそのようになっておらず、むしろ分断そのものがみられる、との返答がなされた。

関連する別の質問として、4つのうち「チンラン」以外はプラジャでもなれる、それらはプラジャに対しての「異人」表象と直結しないのではないかと、との疑問が出された。それへの答えとしては、確かにプラジャもそれらになれるが、フィールドでの言葉の運用に注目すると、それらは「他者」と結びつけられている、と述べられ、論

文での扱いが弁護された。

次に、4つの異人表象を扱う諸章のうち「ドゥキ（苦痛に悩む人）」の部分は個人のライフストーリーが中心であり、その前の流れと異なるとの指摘があったが、これに対しては、慣用的、一般的な書き方から外れるかもしれないが、個人のライフストーリーも民族誌としては必要であるとの主張がなされた。

4つの位相に関しては、それが共時的でパラレルな相であるのか、それとも層を成しているものであるかとの質問、および、それらが互いに切れているものかそれとも部分的に重なり合うものかとの質問があった。前者に関しては、時間的な層としてまとめようとする方向に走ったこともあるが、むしろそれはマイナスであり、共時的な位相として扱っているとの答えがあり、後者に関しては、重なり合いもあるが、記述においては、後の「接続」のためにあえて切った形でまとめたとの説明があった。

論文の構成に関しては、半分は成功しているが、しかしこれでは対象とする村自体が見えてこない、もう少しオーソドックスな章の立て方でもよかったのではないかと、との意見が出された。これに関しては、本論文では表象や想像を重視したまとめ方を取ったため、具体的な図、系図等はあえて出さなかった、また本論文が、執筆者と（「ドゥキ」の章のライフストーリーの当事者である）ヒラ氏との物語としての面をもつため、村を具体的に提示することは避けたとの回答がなされた。

論文中で執筆者が批判している二項対立に関しては、原理的二元論と世界観としての二元論は別に考えなければならない、また、執筆者が肯定的に取り上げている「切断」は二項対立と異ならないのではないかと、との発言があった。これについては、相互的な排除があってはじめて二元論、二項対立となるのであり、「切断」はそれとは異なる概念であるとの答えがなされた。

その他の問題点として、「イメージ」の語の用法、言語音の類似からの意味の類推、「プラジャ」、「チョオバン」、「チェパン」等の民族名が語られる文脈の明確化、女性の排除についての考察の深化の必要性なども指摘された。その中には、今後の課題として再考されるべき点もあるが、あるものは本論文としては周辺的な問題にとどまり、あるものは、これからの学問的な議論の対象とされるべきものと考えられる。

総じて質疑に対する応答は、対象を懸命に把握しようとする思考に基づいている真摯なものであった。また、調査は大変にしっかりなされており、文献研究も博士論文の水準として満足のいく程度になされていることが窺えた。

論文審査及び学力の確認の判定

本学位請求論文は、人類学の原点といえる長期間のフィールドワークによる詳細な観察と聞き取りに基づき、「プラジャ」と呼ばれる人々が何者であるかを、調査者自身に向けられた異人表象を手掛かりに、文化・社会の多様な側面を導き出しつつ把握しようとしたもので、従来のエスニシティ論とは異なる新たな視点をもって民族的イメージを捉えている。相互的、平等主義的な交換のなかに生きてきた人々が、階層的な観念ももち、開発の流れの中で他者との関係を模索する様相を、独特な構成と分析でまとめたこの民族誌は、ネパールの社会文化研究を一步進めるとともに、自己表象をめぐる民族論に一石を投じるものと評価される。

本論文に関しては、一見美しく見える発見的な図式でブリリアントにデータを提示することよりも、学術的な廉直さを優先すべきではなかったかとの批判もあったが、基礎となっているデータの質の高さと調査の困難さ、随所に見られる鋭い考察により、本論文が博士論文としての水準を超えているとの点については異論がなく、全員一致で、博士（学術）を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

以上